

和名倉百年の森

2024
10.1

48号

wanagura hyakunen no mori

NPO 法人百年の森づくりの会

水を育む山への恩返し 荒川源流域での森づくりと広報活動 (応援: 金紋世界鷹 みどりと川の再生支援寄附)

巻頭言…………… 1 / 総会・記念講演会…………… 2-6 / 会員便り…………… 7・8
令和6年度 第17回通常総会開催…………… 8 / 旧三峰分校事業…………… 9・10
和名倉山森づくり報告……………11・12 / 福島県田村市の百年の森……………13・14
長瀬宝登山下草刈り活動報告…………… 15

NPO活動のワクワクの積み重ねに黎明を感じる

理事長 高岡正彦

何年か前に高校生を引率して『秩父いわなの生簀見学』をさせてもらった。今、ネットを開いて「荒川水系溪流保存会」の生簀を見学させてもらった事を思い出した。当時は、美味のイワナを生簀で保護している貴重な場所として見学させてもらったのだ。生簀での保護も大変だが、荒川水系での保護となると雲を掴むような話である。今はどんな活動しているのだろうか。

昨年暮れから、さまざまな自然保護活動団体にボランティア参加させてもらっている。体験させてもらうことも、そのまま入会させてもらうこともある。11月に北本自然公園にお邪魔して、まずはバードウォッチング体験をした。さまざまな野鳥を紹介してもらったのだが、覚えきれない。でも双眼鏡で追えただけで感動する。カワセミを見つけた時には小躍りしてしまふ。この体験から、埼玉県生態系保護協会と出会い、川越伊佐沼でのバードウォッチングにも参加、今は地元さいたま市西区「秋葉の森総合公園」での活動を重ねている。最初はニホンアカガエルの産卵地の草刈りだったが、その後、産卵情報が入り立て続けに、野鳥のミソサザイ、ガビチョウ、また、ミドリシジミ発見報告が無い込んできます。薄っぺらな興味心からの始まりだが、ワクワク感がたまらない。

今年度、本会は埼玉県NPO活動促進助成事業に参加させてもらっている。その事業として、SAITAMA社会貢献ワークショップが開催された。内容は、地域課題発表会とNPO同士の交流会でした。私たちも「水を育む森、森を育てる山への恩返し」のコンセプトに活動している旨を紹介した。参加NPOの中には「子ども食堂の運営」「子育て支援」「介護施設入居者の社会貢献活動」など、草の根活動的、庶民の力を感じた。

今、これらの力を大いに発揮する時代だと感じている。欧米人とは異なり日本人は、ボランティア・社会貢献活動に一身を引く傾向があると言われていた。今は、違う。災害の多い日本では、その復興には災害ボランティアが欠かせない。「素直に人の役に立ちたい」「人と笑顔を分かち合いたい」ということが行動に移しやすくなったのだろう。SNSなどで、発信力と情報収集力が以前とは全く違う。もちろん、誤発信、フェイク情報など弱点もあるが、乗り越えていくしかないと思っている。

間が集まったが、次の一手が踏み出せない日々が続いている。それでも、胸の奥には以前と変わらない思いがあり、和名倉山にこだわりたい。個人的には、避難小屋的な東屋のようなものは作れないか、などワクワクするような活動を目指している。

和名倉山での活動のほかに、長瀬宝登山における植林活動を行なっている。今は、植林した広葉樹の下草が作業が中心であるが、そろそろ植林した木々を鑑賞してもらう取り組みをしたいところである。

そして、さらに、秩父市からお借りしている旧大滝小学校三峰分校の活用である。これまでも「親子自然教室」「インターハイ登山大会」「埼玉高体連登山大会」「雲取山荘歩荷」などの催しに使ってもらい、自然を楽しむ活動を支えてきた。ここに新たな提案がある。この旧三峰分校は標高975mの所にあり、真夏でも、朝は20℃以下になる。つまり避暑地としての活用である。いわゆる観光地の展望の豊かさはないかもしれないが、木々に囲まれて、自然を味わえる避暑地として考えると、都会から最も近い避暑地になり得ると考えている。この新たなワクワクを想い、さらなる憶いを募らせている。

総会・記念講演会（令和六年六月二日）

美しい秩父の森を、子どもたちや将来世代に守りつなぐ



講師

埼玉県生態系保護協会
事務局長

前田 博之

ご紹介いただいた前田です。当協会が発行していますナチュラル・アイという会報をご覧になって、今回お声がけをいただきました。当協会が森に関する活動を主に担当していたことから、今回お話をさせていただく経緯になりました。

埼玉県生態系保護協会についてですが、イメージとしては自然保護をやっている団体というのには伝わりませぬ。実は今年で財団法人化して40年目という節目の年になります。会長の池谷奉文のもと、自然を守り取り戻す活動をやってきました。

いろんな方々の支えがあつて活動が今に至るわけですが、ある方が私どもの活動に賛同くださり書いていただいた絵があります。かつての埼玉県の奥山は大変な豊かな自然があり、いろんな生き物がいたんじゃないかと、いろんな絵です。奥山の豊かさの象徴として滝が流れ落ちている上に4頭の狼が描かれています。遠吠えを出していますが、奥山には狼が頂点にいて、いろいろな生き物が棲んでいるという絵です。また、埼玉県の低地でも昔は豊かな自然があり、最近埼玉県内でも話題になっているコウノトリがあちこち飛んでいたのではないかと、いろんな絵です。当協会は、コウノトリやトキ、オオタカがいて、町から奥山まで自然と共存する持続可能な地域づくりを展開していき

いと考えています。

埼玉県もそうですが、行政は自然を守って取り戻すためのいろんな計画を作ります。その時に注意している言葉があります。「緑」という言葉です。その中で危ういのがひらがなの「みどり」です。この言葉には幅が広すぎて、花壇の花も芝生も「みどり」になります。私たちの「緑」は、ただ緑色に見える緑じゃなくて、いろんな生き物がそこに棲んでいる緑を大事にしたいと考えています。行政の計画は何を対象にしている「緑」なのか注視しています。同じく森もそうです。

私も埼玉県秩父地域で森を守る活動を大がかりにやっています。埼玉県の地形は西の方が標高が高く、険しい山岳地域です。東の方へ段々丘陵地域になり平野部から低地になっていきます。秩父市、小鹿野町、横瀬、東秩父、長瀨、皆野がある秩父地域ですが、植生をみると人工林率が割と高く、その他が二次林、自然林など広葉樹の森が主体のところなんです。

秩父地域の土地の所有でみると、森の大半は一般個人の方もしくは企業や団体が持っている私有地です。国有林や県有林はわずかで、誰が持っているのかで森の将来に大きく影響します。また所有が不明のところもあり、全国的に問題になっています。私有地が個人の場合、相続で

森を次の方が引き継ぐのか、それも引き継がないから手放すのかという機会が必ず来ます。そういう問題をやらんだ森が秩父地域にもあります。代々森を持ち続けるのが難しい時代になってきています。何とか将来残すための方法についてご相談を受けますが、森を守り続ける仕組みは日本の法律制度では残念ながらありません。

【水のトラストと基金】

私も最終的に取った手段が森を買い取る方法です。イギリスで生まれたナショナルトラストという活動があります。イギリスの自然史や歴史的建物を一般市民の皆さんからの寄付で買い取る活動です。2002年にこれと同じ手法で秩父の森を買い取る活動をやるうと基金を立ち上げました。森を守るという目的ですが、見た目が森林などどこでもではなく、生き物がたくさん棲める森を将来にわたって残していきたいと考えています。

そのためには、水を生む森であり、おいしい空気を生む森でもある。土壌も育む森で生き物がた

くさん暮らす森を将来に渡って残したいということでも基金を立ち上げました。基金の名前は「水のトラストしよつ基金」です。何故、水のトラストとしたのか。森のトラストでも良かったのですが、森だけでなく水も育んでいますという方がより伝わると考え、水のトラストとしました。



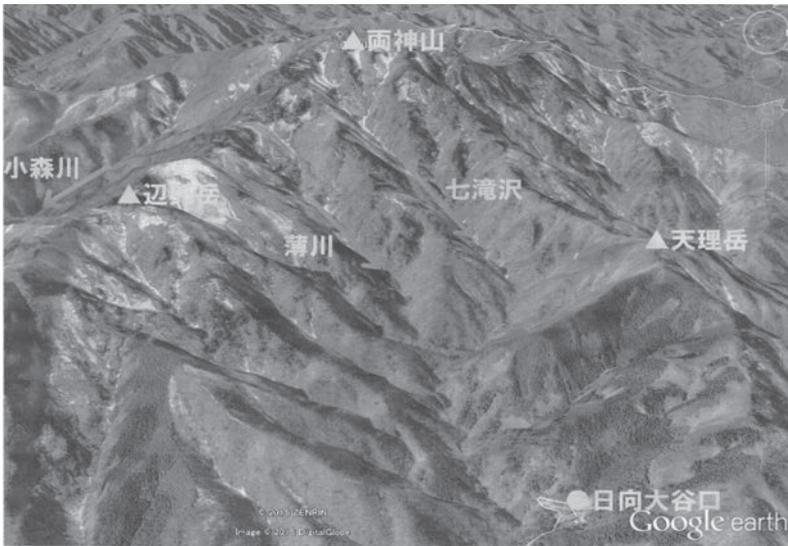
これまでに確保した水源の森

これまで私たちが、ナショナルトラストによって取得した森は全部で10箇所、約1700haの森を確保させていただいています。全て民有地だった森を買収したり、場所によっては寄付で取得しています。場所は秩父市、小鹿野町、毛呂山町です。「ありやまの森」だけが毛呂山町に位置していて、寄贈でいただいた森です。両神山の二ヶ所が小鹿野町、それ以外は秩父市に位置するトラスト地です。私どもは活動する時に東京湾まで入れた地図を使っています。東京の人たちにも秩父の森が関係していることが一目瞭然になるのです。

最初に取得をしたのは「浦山ダム」です。浦山のダム湖は秩父桜湖と言われています。ダムに面したところに4箇所取得しました。一番最初に取得した「浦山1号地」は当時、林道を作る計画がありました。必要以上に林道を通すと自然は壊れ、地域にとつても良くない。何とか止めたいという思いで、1号地の土地を確保しました。そして周辺の土地も確保しました。面積としては1号地は5ha、3号地は9ha、2号地、4号地は1ha位です。「大胡桃山の森」は、小森川の支流、小鹿野市街のすぐそばです。ここは寄贈でいただいた森で、1ha位の面積です。

【両神山ナショナルトラスト】

大きな規模のトラスト地が両神山に二箇所あります。1号地は6ha弱位で小森川に面したところです。そして水のトラストのメインになったのが両神山の2号地で約1,232haあり、山頂も一部含むような一番大きな面積のトラスト地です。



両神山に登られた方はご存知かと思いますが、東側から登る日向大谷ルートと小森川の方からの白井差ルートがよく知られたルートです。トラスト地として取得させていただいたのは日向大谷側です。ざっくり示すと天理岳と辺見岳に挟まれた範囲にある薄川の流域がトラスト地です。このトラスト地は自然豊かな森が残っています。両神山は別の側面があります。日向大谷登山口に両神山社の里宮があり、山頂に近いところに奥宮があります。両神山社の奥宮には狼が祀られていて、里宮には狼の護符があり、大口真神と呼ばれています。ま

た、石仏石像がたくさん山中に残されています。修験者の方々が昔から信仰していた山です。両神山は山岳信仰などの歴史文化を含めてナショナルトラストで守りつなぐため、水のトラストしよつ基金の活動の一つですが、プロジェクト化しました。「両神山ナショナルトラスト」と呼んでいます。2015年9月に、土地を買い取る方法で取得しました。面積が1,232haと広いですが、奥秩父の方とはいえ相当な額で2億円かかりました。

イギリスの方で発足をしたナショナルトラストを日本の中で展開している日本ナショナル・トラスト協会と共同で取得に至りました。多くの方の寄付もあります。が、お一人篤志家の方からも相当のご寄付をいただきました。自然を守るためにこれだけの規模の土地を取得するのは、恐らく日本で初めてで読売新聞や日経新聞など5紙に取り上げていただきました。新聞に取り上げられるのは非常に大事なことだと思っています。会報やホームページで活動の発信をしますが、なかなか一般の方には知っていただけません。多額の寄付をいただいた篤志家の方からのご意見で記念切手シートを作りました。記念切手シートには両神山のトラスト地で撮影した写真を載せました。切手シートは1万円以上寄付を頂いた方に進呈しています。ただ1万円というのは結構いい額です。まだ5,600枚余った状況で

す。当時は1枚82円ですが、今度110円になりますので、どうしようかと悩んでいます。また、川口で水のトラストを知っていたら活動をやった時に、いろんな場所から両神山はこんなギザギザした山ですという両神山十景の写真とトラスト地の場所と両神山十景を示した地図を作成しました。一番遠いところは新都心です。武甲山の三角のどんがりを目印に、天気が良ければ右手の方に両神山のギザギザが見えます。

両神山トラスト地の中に、日向大谷口から登り始めて最初に沢が大きく別れるところに会所という休憩スペースがあります。ここに当協会と日本ナショナル・トラスト協会の名前前で「ここはクマタカのみむ森です。日本百名山のひとつ両神山の自然は、ナショナルトラストによって守られています。世界の人々が歩き楽しむところです。美しい自然をこれからも買い取り守りたいと思っています。」というメッセージとともにクマタカの写真を使った看板を立てました。同じように山頂近くの休憩スペースにカモシカの写真を使ってメッセージ入り看板を立てました。もう1つ清滝小屋という山小屋の少し手前にある弘法の井戸という水場の横にクノハズクを使った看板を立てました。看板を立てた後に台風でこの辺りが崩れましたが看板は幸い奇跡的に岩とか木の直撃を受けずにそのままの状況になっています。クノハズクはふくろうの中でも非常に小型です。奥山の岩場みたいなところに春の繁殖シーズンになると飛んできます。生活クラブ埼玉で県

内のいろんな活動する団体を応援してくださるといふキャンペーンがあり、コノハズクが棲める森を守るため、繁殖しやすいように巣箱をかけた、その様子を調査するためのカメラを設置するプロジェクトを立ち上げ、その時に寄付をいただきました。

鳥取県に八東ふるさと森というキャンプ場があります。自然環境を守りながら、コノハズクが毎シーズン来て繁殖が見られる素敵なキャンプ場です。そこに当協会の職員が行って、コノハズクが繁殖しやすい巣箱について教えていただきました。その時に1つ巣箱をいただきました。それを基に5つ巣箱を作りました。

両神山は毎年怪我をしたり、亡くなる方がいる結構険しい山です。なおかつ、巣箱を設置する場所は登山道に面したところだとちよつとよろしくない。コノハズクが入って欲しい場所ですから、登山道から離れたところへ持っていきたい。リュックにくくりつけて、巣箱をしょって上がりました。当然ながら、険しくて巣箱を設置するための梯子を担いでいけない場所です。一緒に手伝っていただいた方で、白井差の登山口に山中豊彦さんがおります。山中さんは秩父の森について一番詳しい方です。山中さんに現地での梯子を作りたいと言われて手作りの梯子を作りました。その梯子を使いカメラと巣箱を設置しました。

カメラにどんなものが映るのか。自動撮影です。最初に映ったのはモモンガです。次に写ったのはムササビです。入ろうとしても大きくて入れなかつたようです。それから、鳥の巣箱をかける時に四つ足のものや

蛇などが登りにくくするためよく巣箱の下にトタンを巻いたりします。トタンなど持つて上がれないので、効果は分かりませんがアルミホイルを巻いてみました。数ヶ月経つてみて爪痕がついていて、ツキノワグマが写っていました。ツキノワグマは両神山だけではなく、浦山ダムでもクマ棚が結構見られました。昨年全国的に熊の出没がニュースになっています。埼玉県内でも同様です。

武蔵野銀行では銀行の職員と退職されたOB向けに会報を作られています。昨年アーバンベアについて記事を書いてほしいというご相談を頂き、改めて情報収集をして、監修をさせて頂きました。2022年に78件、埼玉県内でツキノワグマの出没が見られたが、2023年は134件だった。クマ出没のニュースで、専門家の方が森の方で今年はどうぐりの実のなりが悪いからと答えることがよくあります。

どんぐりの実のなりが悪ければ秋にたくさん出没するという事ですが、どんぐりの実がなる夏とか夏前の出没が増えています。単に実のなりが悪いということだけじゃない。山中さんの話では奥山の方で熊棚や足跡、ふんなどの痕跡が、昔はそこら中あったのが、今段々見られなくなっている。

一方、集落の周辺で増えているのは事実です。シカの影響、鹿の食害で下草がほとんどなくなった森が全国的に広がっている。ツキノワグマは基本的には植物食がメインです。木の実がなる時は木に登って食べますけども、夏前ですと昆虫を食べたり、下草を食べたりする。下草は鹿の影響を受け、植物が減ってしまえ

ば、昆虫にも影響が出る。山中さんは、鹿の影響が大きいのではないかと言っていました。

カモシカも影響を受けています。昔は天然記念物で奥山にいて見かけたらラッキーという存在でしたが、今は鹿に追われて集落の方で見られるようになっています。それと同じようなことがクマにも起きています。ではないかとおっしゃっていました。もちろん、人慣れをして、怖い思いをしてない親ぐまが増えて、子供も警戒心を持たずに近づいちゃうこともあります。

もう一つ、クマ自体は一日に10キロ以上距離を移動することがあります。何件出没イコール何頭と言えるのか。いろんな場所に顔を出したクマは同じ個体かもしれせん。今年埼玉県は予算を取って頭数調査すると聞いています。集落周辺で出没が増えているのは事実ですが、山全体で見るとは増えていないのかという根拠が見出せない。どのような調査方法をとるか注視しないとイケないと思っっています。法律が変わって、鹿やイノシシのようにあらかじめ計画を立てればツキノワグマも駆除しやすくなりそうですが、埼玉県の状況を考えると必ずしも増えてるとは言えない可能性があります。

【奥秩父ムジナ沢の森】

「奥秩父ムジナ沢の森」は約432haあります。中津川の源流に近い場所です。中津川に流入する支流はガク沢、ムジナ沢、鎌倉沢があります。山登りの好きな方は南天山を目指して、鎌倉沢沿いに登った方もいると思います。ここは登山道がありますが、私どもが所有しているムジナ沢は登山道がありません。群馬県

との県境です。非常に地形も険しくて登山道もないので、すごくいい自然が残っています。個人所有の森でしたが持ち続けられないということとで寄付を募って買取りました。現地に行きますと岩に穴が開いて、その穴から滝が流れ落ちる九十三四郎滝という綺麗な滝があり、滝の上からシオジとかサワクルミなどの木の森が広がっているトラスト地になります。さらに上の源流部に行くのと新緑や紅葉の時期は素晴らしい森があります。

ムジナ沢を下りると中津川の合流地点に橋があり、王冠キャンプ場があります。県内では一番源流に近いキャンプ場です。上には集落はないですから水が綺麗です。キャンプ場のオーナーは、自然にすぐ理解がある方です。キャンプ場の敷地内に「この美しいムジナ沢の自然は皆様の尊い思いによって守られています。」という青い看板を無償で立てさせていただきました。

ムジナ沢の森は一見するとすごくきれいな見えます。でも昔から山に登られてた方からすると違和感ありありの山です。本来スズタケが茂って見通しがきくはずがない。森に馴染みがある方からするとありえない光景です。あちこちで鹿が確認され、糞がたくさん落ちていて、皮がはがれているのが見受けられます。両神山でモニタリングしたカメラにも鹿が写りました。何とか対策を打たないといけない。トラスト地の中で鹿の食害からかろうじて残された貴重な植物がどの辺にあるかという調査もしています。鹿が昔は食べないと言われていたアセビを最近はやむなくちよこちよこ食べるものがあ

ると聞いています。このアセビの根元にかろうじて希少植物が残っている状況もあります。

「奥秩父ムジナ沢の森のトラスト」をやるときに、応援していただいた岩堀建設工業という建設会社の社長さんがおられます。鹿の被害にすぐく危機感を持っておられる方です。両神山1号地のトラスト地の小森川の手前に約4haの沢沿いの森を取得をされ、鹿の被害対策をやりたいというご相談受けました。生き物が棲める森を守るためにシカ柵を設置して、森の回復を見守っていきたいという趣旨の看板を立てておられます。自費でシカ柵をぐるりと設置をしました。シカ柵を設置すると、埋土種子と言って土壌の中に植物の種が眠っていて、チャンスが出たら発芽をします。シカ柵を設置するまではほとんど見られなくなっていた植物が1、2年で復活しつつあります。

シカ柵設置場所はかなり険しい斜面で、設置して1、2年して倒木でネットを突き破ったりした箇所があります。地形が複雑でネットで隙間なく囲い切ること自体が難しい場所です。山中さんに見ていたように、何とか大型のシカは入れないようして頂いていますけど、倒木は防ぎきれない。鹿の対策は本当に悩ましいというのが正直なところだと思います。

【栗尾沢の森】

大滝地区の荒川の支流の沢に面した斜面に、面積的には2.7haの「栗尾沢の森」があります。林業会社の方から森林経営委託契約締結の話が来ました。国や県からの予算を使って人工林の針広混交林化をやりたい

という話です。栗尾沢のトラスト地は人工林でなく広葉樹の森です。関係ないようですが、決まりとしては森が人工林だとか二次林だとかは関係なく、森の流域面積の1/2以上の地権者から同意が得られれば、この予算が使えるという仕組みなので同意を求められました。

トラスト地は何も関係ないので同意だけ欲しいとのこと。人工林が林業経営に成り立つような環境で、持続的に材が生み出せるような場所であれば、人工林として使っていけばいいと思います。栗尾沢自体は険しく林業として難しい場所ですから、針広混交林化にして生き物がたくさん棲めるような森になった方が、当協会の考え方にも合うということもあつて同意しました。

【森林ゾーンニング】

埼玉県生態系保護協会の池谷会長は自然を守って取り戻すという活動を埼玉県だけでやっても追いつかない。日本全国で展開していくために日本生態系協会という会を立ち上げました。二つの会は人的な交流もやっております。私も日本生態系協会に所属していた時期があり、その時に関わったプロジェクトをご紹介します。

森林ゾーンニングです。いろんな地権者がおられて、人工林や二次林などいろんな状況の森がありますが、そのまま推移していくだけでは森が抱える課題は解決できない。これから先、科学的な根拠に基づいて、ゾーンニングしていく必要がある。町も都市計画でゾーンニングをした上で、まちづくりするのと同じです。森についてもゾーンニングが大事で、地形

であつたり、植生であつたり、法律条例などを重ね合わせて、科学的な根拠に基づいてゾーンニングしていくという考えです。

愛知県の東側、豊橋の上流に新城市・設楽町があります。愛知県の中でも奥山のエリアで人工林率が高いです。愛知県内で全部で9つ位の地域に分けて、それぞれの地域で生き物が棲める環境をどうつなげていくか、生態系ネットワークを進めるという考え方です。何が課題なのか。埼玉の秩父と一緒に。集落とか農地に鹿とかイノシシが入り込んできて、熊の出没が増えている。人工林が多く、自然の森がポチポチある状況では生き物が棲める良い環境とはいえません。結果として野生動物と私たちの暮らす人との軋轢が生じているという構図がこの地域ではあるような場所でした。

奥山地域における森林ゾーンの基本的な考え方をお示しします。どのようにゾーンニングしていくのか。生物多様性、生き物が棲むための場所を大事にしていく地域。例えば、自然公園の特別保護地区だったり特別区域、自然環境保全地域、鳥獣保護区の特別保護地区です。貴重な自然が残る天然記念物になつている場所、特定植物群落の場所とか自然林がある場所については、現況がどうあれ今後は自然環境を一番に考える場所にするべきという考え方です。中には現在人工林のところも含まれていますが、人工林として材が取れるところまでやるにしても、その先は再度スギ、ヒノキを植えるのではなくて、広葉樹の森に戻していく。

その次に自然災害の関係として、

土砂災害の危険箇所や土砂災害警戒特別警戒区域、土石流の危険流域だったり急傾斜地崩壊危険箇所、地すべり危険箇所が各地域で設定されています。非常に地形として厳しい場所なので、わざわざその森をいじつて、人工林として作業にかかる人にとつても危うい。こういう場所は積極的に、森に手を入れない方がいいという考え方です。

二つのことをやった上で残った場所の人工林と二次林で今度は何を見られるかという、まず地形です。地形が35度よりも険しいところは基本的には人工林として積極的にやる場所からは外した方が作業効率としていい。傾斜の緩いところは人工林として継続していく。

次に尾根沿いです。尾根沿いは、人工林が広がっているとどこでも、取って植えずに元の木が残されているところが結構あります。自然環境にとつても大事な場所ですので、尾根沿いは基本的には自然の森に残していく。

もう一つは、今現在通つてる林道からの距離です。林道から200m前後ぐらいの距離であれば作業もやれるが、それより遠いところ、昔の先祖の方々はずごく苦労されながら植えたかも分かりませんが、今後経営として成り立つかという厳しいところが多いです。そういう場所は積極的に人工林として使っていく場所から外していく。

あとは、尾根沿いと同じく沢沿いですね。沢沿いは生き物にとつて非常に大事な場所です。生き物の棲むための場所としていく方がいい。以上のような条件付けをしていく考え方です。

不思議樹妄草 1 「イナバウアー」

会員 大池 靖司

先日、ひさしぶりに金メダリストの「荒川静香」さんに会ってきました。満面の笑顔、肌の色艶もよく、軽やかな身のこなしでハイタッチすると、勢いよく氷上に飛び出し、上半身を大きく後ろにそらして……

嘘です。妄想です!! 実際に会ってきたのは、イヌブナの「イナバウアー」です。百森の仁田小屋から初めの植林地「一步の森」に向かい、ジグザグの急な作業道を小一時間登ったところにあります。十数年前より、ブナ、小檜などの苗木、幼木、それらを護るためのネットやポールを担ぎあげていま



した。ここまでくると先は少し緩やかになり、小休止です。雲取山が南にみえます。次に目にするのが、地面から立ち上がると仁田小屋沢方面に向かって横に伸びる不思議なブナです。荒い息遣いの中で誰言うともなく「イナバウアー」となっていました。確かに彼女の決めポーズ「イナバウアー」とは言い得て妙です。前回見た時より幹回りも一段と大きくなり、両足部分は明確に割れてました。

普通、樹木は光を求めて上に伸びるもの。そうはさせない何らかの事情が幼木期にあったのでしょうか。雪国の山では毎年の雪の重みで根元から曲げられたかと思われるブナによく出会いますが、ここは関東の奥秩父。標高 1300～1400 mとはいえ、毎年の大雪はありえない。しなるように曲がった幹は、そのまま水平を保ちながら、樹冠を二つに分け、初めて空に向かう。この水平部分に長い間倒木でも覆いかぶさって素直な成長を妨げていたのか？それとも「イナバウアー」の個性だったのか？

それよりもっと不思議なこと、こんな成長を続けていると地下の根は地上部を支えるのに大変なはずです。台風の過ぎ去った登山道などで、剥きだしの根を空に向けた倒木に先を塞がれることがあります。ほとんどの場合その土壌は瓦礫で、直根を見ることはありません。根はだいたい円形に広がり樹形の範囲内に納まっています。「イナバウアー」の場合、たぶん直根もなかりょうし、もし地上の樹形に沿って地下に根を張るとしたら…… ホチキス形？それとも根張りの途中で安定できる大石でも抱えたか？

今回、和名倉まで歩くのは無理。仁田小屋の頭までなら何とかと考え、小屋を出ました。「イナバウアー」のところから意外と時間がかかり、山頂の標識 1554 mのプレートを見つけると、水を一口飲んで、引き返しました。下山始めてふと気づいたのですが、以前あれほどあった笹がない。作業道を埋め尽くしていた笹藪がない。4～5年前に枯れたとは聞いてましたが、笹枯れ 60 年？周期説を初

会員便り



めて目にしました。根も葉もない事実です。だだっ広く歩きやすい。作業道を外しても何処でも歩けます。調子に乗ってどんどん歩いているうちに道標の赤テープも見失って、はじめて尾根の間違いに気づきました。ただ不思議と風がざわついて、正規のルートに戻そうとしているように感じ、トラバースを続けました。そしてルートらしきものの先に手を振る「イナバウアー」を見つけたときは、心底安堵しました。

「尾根道に入る手前から、間違えるなど分かったわ。焦っていることも。私、空気読めるから」と笑うのです。「イナバウアー」はおしゃべりでした。根と幹のバランスのこと、植物間の熾烈な競争、お互いの利用利他、風や星との話、時の過ごし方、などなど一所懸命話してくれました。人社会で起きてることとよく似てるように感じましたが、とにかく精一杯生きてることが伝わりました。幼木期の事情について尋ね

たときは、ハラスメントと言ったきりでした。ただそのあと「おはなつみ」と途切れるように聞こえた気がします。こちら半睡状態でしたので、それが過去の事情を指したものかどうか、定かではないですが、するといきなり耳元でトゥーランドットの「誰も寝てはならぬ」を歌い出したんです。びっくりです……これ本当です！ほんとです。ホント？

令和6年度 第17回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の令和6年度第17回通常総会が、6月2日(日)埼玉会館において開催されました。

当日は、令和5年度事業報告・収支決算案、令和6年度事業計画案・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。また、会員の種類に学生会員の増設、役員定数の変更、貸借対照表の公示方法の変更について定款の改訂(案)を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。

総会終了後、「美しい秩父を、子どもたちや将来世代に守りつなぐ」と題して、埼玉県生態系保護協会の事務局長前田博之氏による記念講演会を開催しました。秩父地域におけるナショナルトラスト運動について理解を深めることが出来、成功裡のうちに終了することができました。

(講演録は別途記載)



2024年度

旧三峰分校から森を作ろう (旧三峰分校事業)

事業担当 高岡正彦

旧三峰分校とは、秩父市三峰にある元大滝村立小学校三峰分校の事です。現存する校舎は1957年改築されたものです。しかし、1980年分校は閉校となり、その後2002年まで白岡町立三峰山の家として使用されてきました。百年の森づくりの会は2008年からお借りしていて、自然観察教室などの催しや高校山岳部の大会で活用しています。今後、ここを拠点とする森づくり事業を定例企画にしたいと考えています。

第1回 旧三峰分校事業 8月6〜7日

今回は、埼玉県NPO活動促進助成事業に参加することとなり、「水を育む山への恩返し 荒川源流域での森づくりと広報活動」として実施することとなった。埼玉県NPO基金として株式会社小山本家酒造の金紋世界鷹緑と川の再生環境保全事業から支援を頂いている。

まずは、間伐材を利用し、木工加工することによって、木材の利用を広く・深く考えてもらうこととした。

間伐材は、秩父の山の間伐材を有効利用として、社会福祉法人ふらわあ事業所から購入した。薪にする前の丸太の状態で購入した。この丸太から「球体」を作ってみようということとなり、第1段階で立方体に切り出すことにした。チャレンジするのは、高校生11名である。1人ずつノコギリで切り出す。それも大鋸(オガ)を体験してもらった。

最初は、恐る恐る引いていたが、慣れてくると力の入れ方がわかってくる。大きな大鋸は重い



が、丁寧に引くと、しつかり切り進められる。切り口は、鉋を掛けたように滑らかになるのを見て、驚いていた。ノコギリを手にするのも初めての生徒もいた。

次に、ベルトサンダーでカド落としの作業である。ベルトサンダーを扱うのは初めてでしたが、意気揚々として始めた。しかしなかなか球体には近づかない。途中から、球体は諦め、せめてサイコロ型に近づけようと削り続ける。終着が見えないまま、木屑に翻弄され、ひとつがやつ



とそれらしいものになった。次に、うどん作りである。粉から作る事にチャレンジした。もちろん、粉から作るのは初めての体験である。中力粉を3kg用意し、前日、少々の塩をまぶして捏ねておいた。

そして、外の囲炉裏で煮あげる。こんなに大量のうどんを煮るのはたいへんである。さらに囲炉裏の火が熱くて苦労した。

初めて尽くしのうどん作りだった。最後はみ
なで、ダメ出しつつ食べた。こんな事でも貴重な
体験である。

夕方から夜にかけて、キャンプファイヤーと花
火で楽しんだ。中々都会ではできなかったが、
ここでは思う存分炎を見入って、物想いに耽っ
ていた。



分校の周りは楓の木で囲まれている。秋には見
事な紅葉が見られる。今、校庭にはこの楓の実生
苗が顔を出している。このままだと、鹿の餌にな
ってしまうだけなので、移植して鹿よけネットの
中で育てる事にした。



実生苗は、現在5cmほどである。30cmほどになっ
たら、周辺の崩落地などに移植したいと考えてい
る。

もう一度大鋸を引く体験をした。大型の万力が
あれば二人で同時に大鋸を引くことができる。



最後にお土産作品として板材を切り出して、好
きな字を掘り上げる事にした。ノコギリで切った
板材を今度はグラインダーで磨く。そして彫刻刀
で好きな字を彫った。好きな字を選ぶのが一番苦
労していた。ここでは、電動彫刻刀も用意した。
皆、思い思い磨きをかけていた。



今回は、高校生12名に様々な体験をしてもらっ
た。体験で色々なことを感じ、思い、考えるきつ
かけになる。未来に必ず影響する。特に自然の中
での取り組みはか
げがえのないもの
になるはずであ
る。

追伸、この事業
の後ボーイスカウ
トが林間合宿とし
て、更に大学の山
岳同好会が幕営訓
練として使用して
いる。

この施設の有効
活用に、大いなる
期待が膨らむ。



和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当 高岡正彦

和名倉山は、64年（昭和39年）と69年（昭和44年）に山火事が発生し、多くの樹木を焼失した。その跡には成長の速いカラマツを植林するなど、山の復興が図られた。同時期、林業の衰退で山での仕事も少なくなり往来が激減し、多くのルートが2m以上のスズタケで覆われ藪の山となってしまった。

そのような和名倉山を以前のような水を育む山に還元するために、97年埼玉大学ワンダーフォーゲル部OB会が活動を始めた。その後、NPO法人百年の森づくりの会として事業を拡大して、00年までに失われた道の復元を行ない、01年には樹木の生長が遅いところに、和名倉山の在来種であるブナの苗を植林し始めた。植林を始めると、鹿による食害に悩まされ、植林よりも、現有樹木を守るほうが先と考え、現在は現有樹木に鹿よけネット巻く作業が主になっている。03年には旧大滝村村有林の管理小屋だった仁田小屋を改修しこの事業のベースキャンプとして使用している。この小屋は会員の力でログハウス風に作り上げられた。（なお、和名倉山は山頂が県界でない埼玉県の高尾山山々における最高峰である。）

2023年度下半期

10月21・22日 第51回ワーク

久しぶりに、和名倉山山頂からナシ尾根を降りてくる計画をたてた。21日は仁田小屋までのルート整備を行った。仁田小屋尾根は元来作業道なので、急傾斜が続くし、トラバース道は路肩が崩れやすい。整備だけでなく、ルート自体を変更することも考えた方が良くもれない。

22日は山頂アタック、仁田小屋からの登りだがそれでも、標高差1000mある。夜明け前の5時には出発、仁田小屋の頭まで2時間、松葉沢の頭までさらに1時間半とゆっくり歩く。時間の関係で、山頂へは行かずナシ尾根分岐から大洞ダムへ下山することとした。



ナシ尾根は、以前の藪はなく展望もよく、和名倉山の尾根の中で最も快適なルートと言える。ただし、藪がなくなった分、歩きやすくなったのだが、下部の緩やかな支尾根が明確でなく間違いやすい。

3月30・31日 仁田小屋周辺事前調査

大洞林道の日陰には、若干雪が残っている。作業道で路肩が崩れている箇所がいくつかある。また、小屋の扉の開閉がうまくいかない。施錠するのに手こずる。次回ワークの課題である。

5月25・26日 第52回ワーク

今回は、参加者18名（内高校生9名）と久しぶりの大人数である。高校生はいずれも山岳部員だがそのうち、1年生3名、新入部員の3年生3名、経験者は2年生の3名である。安全はもちろんだが楽しいワークを心掛けることとする。



ルート整備用の資材を、皆で分担して荷上げる。大変だが、皆で取り組むと力が湧いてくるものだ。仁田小屋に着くと、昨年も経験している2年生3名は薪割り作業を行った。この3名は中学時代剣道部だった。安定感がある。



1年生3名は小屋の回廊部分の修理を分担した。回廊部分の手すりは屋根からの雨粒を受け、腐りが激しく、また、手すりが受けた雨粒は床に跳ね返り床も腐食が激しい。前回来た時に、グラついている手すりは根元から切り落としておいた。



3年生3名はトイレへの通路とトイレの穴掘りを行なった。手を抜きそうなところだが、黙々と作業を進め、見違えるようになった。分担がうまくいった感じである。各々満足感も得られたようである。



2日目は、前回行けなかった和名倉山山頂へのアタックとした。この時期は日の出が早いので4時出発とした。前回と同じようにゆっくりしたペースだったのだが、仁田小屋の頭まで1時間半、松葉沢の頭まで1時間ほどで到着。ここまでで1時間ほど早い。



松葉沢の頭の手前の、唐松林は、昭和39年の山火事後に植えられたのもで直径20cmほどに育っている。延々と続く唐松林に大火が想像出来る。松葉沢の頭から70分ほどでナシ尾根分岐に到着。ここは、ヤマツブガイドでは市ノ沢の頭というらしい。

山頂直前は、相変わらず倒木だらけである。ただし、立ち枯れしているシラビソが多く、昔の鬱蒼とした感じがなくなっている。

この状態が続くと、益々シラビソは枯れて倒木となり尾根に陽が差し込むようになるだろう。そして、奥秩父特有の苔も消えていくことだろう。これらは、自然界の営みとも、温暖化の影響とも言えるだろう。どうにもならないところだが、観察し続けて、発信していくことで、将来見えてくることがあると思っている。



東日本大震災復興支援

4/7～8 東日本大震災植林地田村の森視察(6回目)

副理事長 守谷 裕之

今回は植林地から5分程下がった所に駐車場がありそこで初めてキャンプをした。焚火を囲んで夕食を食べていると吉田徳吉さん(元田村森林組合)が一升瓶の地酒を持って来てくれた。

去年は植林地の中央を走る林道の上側を中心に調べ、27本まで木札を付け高さ太さ測定し記録を取り始めた。もう15mを超すと正確に機材を使わないと測定できない。2日間あるので林道下の新たなブナを探し出し番号、木札を付けた。更に二手に分かれ林道奥の右斜面のブナを探すことにした。植林してから7年経つが全く手つかず状態。植林当日は天候が不安定で雪が降り作業を中断した。植え切れず大量に鉢が置いたままになってしまった。その後、田村森林組合の職員に密植状態で苗木を丁寧に植えてもらう。更に元から根付いてる木々が加わり背丈以上に伸び進むのも容易ではない。手でかき分け枝が顔にビシッと目の近くに当たった。防御眼鏡が必要だ。植林した幼木を探し出すのも容易ではない。鉢で育てたブナとミズナラは不思議に葉が茶色に枯れているので葉の形と葉脈の本数で確認できる。4月だから新緑を迎える前なのでブナ以外の木々は葉も出ていない。枯れ葉を見つけると近づきたいが細い木々が邪魔をしてなかなか進めない。

今回は新たに発見したブナに番号を付けて見たらNo.28～175で147本になりました。当時270本植えたので100本弱まだ見つからない。



ブナばかりの話しをしている。ブナの森にしようとするならば他の木を間伐するしかない。豊かな森という考えで行くと福島県田村市で昔ながらに育っていた木に戻すことになる。生態系という考えで行くと自生していたものを育て続けることが遺伝子を守ることに繋がる。この地域は杉、ヒノキが盛んに植えられている。この植林地は福島原発事故前はシイタケの原木となるナラが育っていた。国からの予算処理で福島県が伐採し森の放射線量がどこまで変化するかという

実験的な事業として行われた。また地主さんがブナ、その他を植えてもいいという事で百年の森づくりの会の苗を植えた次第である。元来ブナはここに生息していたのか後50年後には植林したブナが大きく育ち森が出来ることを見ることは出来ない。森づくりというのは長期的な視点が大事なのは言うまでもない。視察に行った時に元からある木の勢いがあるのであえて植林せず自生の木々の育つのを待てば良いと。

東日本大震災復興支援

森づくりというと人工林を思い出す。豊かな森とは言えないかもしれない。僕が知っている範囲では杉、ヒノキ、赤松、カラマツなどは育ちが早くまさに森を育てているという実感がある。密植され間伐もされていない杉の森は暗く鳥たちの声もしない。同じ杉でも間伐し管理された杉の森はまた違って明るく堂々としている。

百年の森づくり会は豊かな森づくりを目指している。2年間で27本のデーターしかないがその中で平均4.9cm 胴囲が伸びた。豊かな森づくりになっているのか考えさせられる。



ブナの森にするにはチェーンソーを使わないとこれだけの広さを管理することは出来ないようです。



元からある木は根をしっかりと下ろしひこばえとなって次の世代に引き継ぐ植林した苗木とは勢いが違う。

No.	周囲長 (cm) 2023/4	周囲長 (cm) 2024/4	1年間の 成長 (cm)
1	32	36	4
2	21	29	8
3	22	22	0
4	21	25	4
5	21	30	9
6	20	21	1
7	23	23	0
8	22	24	2
9	20	26	6
10	27	29	2
11	27		
12	18	27	9
13	28	30	2
14	23	28	5
15	23	28	5
16	31	33	2
17	25	29	4
18	30	37	7
19	27	30	3
20	32	32	0
21	30	44	14
22	18	26	8
23	27	37	10
24	30	35	5
25	30	38	8
26	17	30	13
27	25	32	7
1年間の成長具合			49

2024年度 長瀬宝登山下草刈り活動報告

4月14日(日) 晴れ メンバー 9名参加

今回はサクラ類を植栽した箇所を中心に下草刈りを実施しました。当初植えた時から17年経過して、サクラは大きく立派に育ち、花も観られるようになりました。

5月12日(日) 晴れ メンバー 8名参加

本日はツツジ類を植栽した箇所を中心に下草刈りを実施しました。ツツジ類はまだ下草の中に埋もれている状況でしたが、しっかり育っています。

下草刈りを終えて、ツツジ類もホットしていると思います。

6月16日(日) 晴れ メンバー 9名参加

東側斜面のサクラの植林箇所の下部の広葉樹林帯を中心に下草刈りを実施しました。毎年草刈りを実施しており、草の生え方が以前より少なく感じます。クリなど広葉樹も大きく育っています。枝打ちも実施しました。



7月21日(日) 晴れ メンバー 10名参加

今日は梅雨明けして、暑い中での作業となりました。東側急斜面の広葉樹の植林箇所の草刈りおよびツル刈りを実施しました。7月は雑草の生え方が違います。新しく購入した電動草刈り機がフル活動です。水分補強をしつつ、2時間作業を行いました。皆さん汗だくになっていました。おかげさまで広葉樹林帯の整備が大分進みました。



9月8日(日) 晴れ メンバー 15名参加

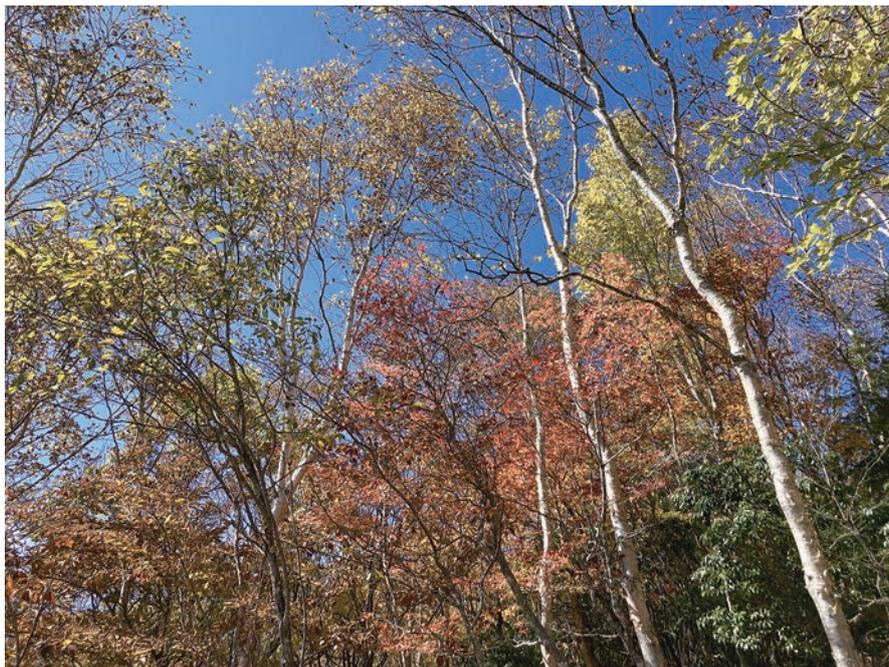
例年8月に作業していましたが、暑さを避けるため今年度は9月に変更して実施しました。今年も三井住友海上火災のボランティアの方々が参加くださり、今回は東側最下部急斜面の広葉樹箇所の下草刈りを実施しました。大勢の参加をいただき、感謝、感謝です。

おかげさまで今年度は延べ51名の方に参加いただき、植樹したサクラ類、ツツジ類、クリやカエデなどの広葉樹林のほぼ全域の下草刈りを実施することができました。

さくら類は大きく、ツツジ類も花付きも良くなり、そしてクリやカエデなどの広葉樹林も順調に育っています。



この活動は、埼玉県 NPO 基金の助成(応援：金紋世界鷹 みどりと川の再生支援寄附)により実施しています。



和名倉山ナシ尾根紅葉

■新会員(会員番号 氏名 住所) 2024.4～

976 佐藤 洋子 桶川市

和名倉百年の森 第48号 2024年10月1日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会 高岡正彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-1 コムナーレ9階

さいたま市市民活動サポートセンター内 メールボックスA-71

TEL/FAX：0480-22-3131

<http://www.100nen-forest.org> e-mail：info@100nen-forest.org